

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：35405

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720051

研究課題名(和文)十八、十九世紀、宮廷御用絵師の通時的画壇史としての研究

研究課題名(英文)The Aggregate World of the Imperial Courtier Painters during the 18th and 19th Centuries from Diachronic Point of View

研究代表者

福田 道宏 (FUKUDA, Michihiro)

広島女学院大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：10469207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：宮廷画壇史という視角に立ち、18、19世紀、宮廷御用絵師の総体の、通時的な動向の把握を目的とし研究を行った。具体的には、当該期にいつ、どのような御用があったかを明らかにし、どのような絵師が画壇を構成したのか、その顔ぶれの変遷をたどることとした。また、宮廷御用への採用では選抜が行われ、そこに働く選抜原理を明らかにすることも目指した。結果、当該期の宮廷御用に参加する絵師の数は増加の一途をたどり、特にその後半期には地下官人など絵師である以前に宮廷構成員である者が増加することが判明した。採用には公卿や門跡寺院など権門との関係が大きく影響し、これまで知られていなかった絵師と権門の関わりも明らかにし得た。

研究成果の概要(英文)：This research traces the Aggregate World of the Imperial Courtier painters during the 18th and 19th Centuries from diachronic Point of view. The Imperial Court demanded numerous painters' works, not only reconstructions of the Imperial court and Royal Residence, but on the occasions of marriage of the Crown Prince, the succession to the throne of the Crown Prince in Edo era. This research reveals when the Imperial Court demanded painters' works, for what occasion, which painter supplied paintings, and how they were screened by positive vetting and practical, during this period. And also this research reveals increase of numbers of painters, and increase of the Imperial Courtier who pursued painting as a side job.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 日本史 絵師 宮廷 地下官人 公卿 大外記押小路家 原家文書

### 1. 研究開始当初の背景

本研究では宮廷画壇史という視角に立ち、18世紀、19世紀の宮廷御用絵師の動向を通時的に解明することを目指した。

問題の所在としては次の2点が挙げられる。一つは、これまで美術史では、主に作品に依拠して、文献史料はそれを補い、裏付けるためのものとされてきた。近年になって近世絵画史研究に文献史料を用い、そこに依拠した研究成果も現われ、漸くその有効性が認められつつあるものの、本研究開始当初はまだ少なかつた。

もう一つには、近世絵画史の研究において絵師の個性に眼が向きがちで、個々の絵師の画業と伝記、そしてその相承関係が流派として検討されるものの、遡上に上げられるのは今日個性的な作品を描いたと認められる絵師に限られ、画壇という視角が欠如していたことである。

これまでの作品を主、文献史料を従とする研究手法、個々の絵師に重点を置く研究には、宮廷周辺の御用絵師を扱う場合、大きな死角がある。もしくは可視範囲の方が狭い。理由は第1に、火事が多い近世にあって、作品が今日まで伝わるのは稀有な幸運であり、現存作品をもとに組立てた美術史では絵師や作品の遺漏が多いからである。第2に通時的な視角を持たなければ、宮廷の御用そのもの、御用をつとめる意味が見えないからである。第3に御用絵師の仕事は、個性の表出=芸術という近代以降の先入観から没個性的とされがちだが、本来的に御用に個性の入り込む余地はないからである。

以上のような問題意識のもと本研究着手に至った。

### 2. 研究の目的

本研究では、上記のような問題意識のもと、文献史料に基づき、宮廷内でいつ、どのような御用があったか(以下、宮廷御用)を把握するとともに、1代限りの個々の絵師や数代にわたる流派や画系として捉えるのではなく、長期的な宮廷画壇と捉えて、どのような絵師が画壇を構成し、その顔ぶれの変遷をたどり、絵師の総体の実像を探ることを目的とした。

また、絵師たちは宮廷御用への参加、そしてより重要な担当箇所への参加を望んでおり、そこではある種の選抜が行われ、画壇内での序列を視覚化する装置でもあった。そこに働く選抜の原理の一端でも明らかにすることも目的とした。

### 3. 研究の方法

上記目的を達成するには、個別の絵師の伝記・事績の検討に深入りすることはひとまず措き、絵師の動向を客観視出来る立場にある宮廷の公卿・地下官人の側の記録など文献史料から絵師の営みを拾い集める作業が必要となる。文献史料の所蔵機関に閲覧に行き、

必要に応じて複写物を入手する。そのうえで、それと併行しつつ複写物をもとに必要な個所の抽出と、翻刻・検討を行うという方法を使った。また、複写物をスキャナで採り込みデジタル化することで、膨大な複写物を持ち歩かなくとも出先でも作業を可能にすることにした。複写物のスキャンとファイリング、整理にはアルバイトを雇用し、約12,000カットのスキャンとファイリングを終えた。

検討の対象とした文献史料は絵師の御用だけを扱ったものではなく、必ずしも宮廷御用に直結しないが、複数代にわたるなど長期的に宮廷の営みが書きとめられたものを重視し、優先的に扱った。

国立公文書館所蔵の大外記押小路家歴代の具体的には日記、国会図書館所蔵の「禁裏御所御用日記」などである。これは通時的な解明のためには断片的な宮廷御用のみの記録からは日常的な御用が見えてこないためである。ほかにも京都大学図書館所蔵の「平松文庫」、京都府立総合資料館所蔵の「原家文書」「平田家文書」「下橋家資料」なども遡上に上げた。

これらを通読しつつ、絵師と宮廷御用に関する記事を拾って翻刻し、それを年表の形に落とし込む作業を行うこととした。また、絵師の登場しない記事も含めて、宮廷の日常を知るために押小路師資の日記を試みに通読、一部全翻刻してみたが、時間と労力がかかりすぎるためこれは中断した。

### 4. 研究成果

近世の文献史料は宮廷関係のものだけでも膨大である。そのため、本研究開始以前に閲覧して、絵師の宮廷御用が現れることが確実なもの、現れる可能性の高いものから優先的に検討を行った。

また、通時的な把握を重視したため短期間の記録ではなく、大外記押小路家の日記のように長期的、継続的な記録を優先することにした。

押小路家の日記は宮廷の数少ない実務官僚であり、外記方地下官人を統括する同家の当主の日記であり、その記事の多くは不易の宮廷の日常に占められ、絵師が登場するのはわずかである。こうした記録にあたることは一見、遠回りのようであるが、彼らが叙任にかかる文書発給に関わっており、ほかにも宮中の諸行事が書き留められるため、ほかの史料では知りえない絵師の営みの一側面が浮かび上がるとともに、絵師の関わった御用が宮廷においてどのような位置にあるかを知ることが出来る貴重なものと言える。

今回は18世紀初頭から19世紀、幕末ころまでの閲覧をし、18世紀半ばから約100年分を複写して、通読を試みた。具体的には正徳5年(1716)から享保8年(1723)までの押小路師岑(1690~1724)の日記、師守(1714~44)・師充(1730~54)の日記から幕末・明治初年にかかる師親(1828~79)の日記ま

でを閲覧した。

そのなかで複写を行ったのは、

- ・押小路師資(1744~1801)  
『大外記師資記』35冊  
(1755~1798、全37冊のうち2冊は関東下向の道中記で関係記事がないため複写していない。4,528カット)
- ・押小路師武(1770~1806)  
『大外記師武記』40冊  
(1781~1805、3,230カット)
- ・押小路師贊(1798~1810)  
『大外記師贊記』5冊  
(1806~10、1,128カット)
- ・押小路師徳(1799~1846)  
『大外記師徳卿記』31冊  
(1811~42、2,897カット)
- ・押小路師身(1819~?)  
『大外記師身記』3冊  
(1827~37、130カット)
- ・押小路師親  
『大外記師親記』13冊  
(1854~1871、うち3冊までスキャン済、124カット)

である。『大外記師資記』の第1冊に関してはその冒頭1か月半にわたって試みに全翻刻をして、その出だしのみを解題を付して「国立公文書館内閣文庫所蔵『大外記師資記』翻刻と解題 その一」(後出〔雑誌論文〕1)にまとめた。

実際に読み進めてみると、一人の日記でも年代によって情報量に粗密があり、また筆跡も若年期の生真面目なものから、次第に乱雑になるなど、その検討は容易ではないことが判明した。なお、歴代当主には公卿の関東参向に伴って江戸・日光に下向する場合があります、その道中記には絵師の宮廷御用は含まれないため、検討を行っていない。また、予想以上に各冊の丁数が多く、膨大なため、いまだ複写を終えた全冊を精査するには至っていないが概略はおさえ、絵師の記事の抄録を作成した。まだ読み飛ばしている記事もあるかもしれないが、今後もう少し時間をかけて精査したい。

ほかの史料では仙洞御所の院伝奏などを勤めた公卿平松家伝来の「平松文庫」は京都大学図書館ホームページの電子図書館から画像をダウンロードして検討を行った。文化11年(1814)から同14年にかけての『議奏御役中雑記』4冊(669カット)の検討、寛政13年(1801)から文政3年(1820)にかけての『御用帳雑記』30冊のうち第21冊まで(3,183カット)の検討を行い、絵師の記事の抄録が完成している。同じく『職事方御剪紙留』11冊からは絵師の叙任に関わる16件の記事を見出した。

なお、同時に読み進めていた「原家文書」のうち、『御屏風・御衝立・御小襖御絵様扣』に含まれる絵師の宮廷御用の担当をまとめた記録により、時代が下るにつれ、宮廷御用をつとめる地下官人の割合が増加し、その大

多数がこれまで絵師として全く名の知られていない者であり、押小路家の日記などに現れても知らなければ気づかないことから、御用ごとの絵師の顔ぶれの把握の優先順位を上げることにしたが、まだ完成はしていない。

また、同じく同時進行で閲覧調査を行っていた幕末の「下橋家資料」などを見ると、幕末の御用に際して絵師が先祖以来の履歴を踏まえた記述があり、幕末の宮廷画壇の御用と顔ぶれの把握を最優先することにした。

結果、年代のよって文献史料の量や質にばらつきがあるため粗密はあるものの、一定程度客観的な宮廷御用の把握が可能となり、文献史料ごとに作成した絵師の記事の抄録を年表の形に整理編集しつつある。また、顔ぶれの変遷と世代交代の様相を追うため、星取表のような表の作成を試みたが、件数が多すぎてエクセルでの処理が困難であり、また、印刷可能な用紙では一覧しづらいため、よりよい方法を模索している。

こうした成果の一部は次項のような論文、口頭発表で発表したが、現在、「下橋家資料」に見られる近世最末期、慶応3年(1867)の明治天皇女御(寿栄君、のちの一条美子、昭憲皇太后)入内の際の絵師の御用に関して、絵師の側の申し入れによって担当する仕様や画題が変更になるなど、興味深い事例もあり、御用自体が全く未紹介であるので、論文を準備中である。ほかにも、複数本分のテーマがあるが、いずれも書きあがり次第、順次学術誌等への投稿を行う予定である。また、出来ればインターネット等、論文以外の形でも絵師の御用の一覧など公開していければと考えており、すぐにも可能なものではresearchmapの機能の活用も考えたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

1. 「国立公文書館内閣文庫所蔵『大外記師資記』 翻刻と解題 その一」福田道宏、『広島女学院大学生生活科学部紀要』20号、142~127頁、2013年、査読なし

2. 「文化四年、原在明の江戸下向と享和・文化年間、原家の動向」福田道宏(単著)、『京都造形芸術大学紀要』17号、122~141頁、2013年、査読あり

3. 「宮廷御用の幕末」福田道宏(単著)、『京都造形芸術大学紀要』18号、89~108頁、2014年、査読あり

〔学会発表〕(計 1件)

1. 「宮廷御用の幕末」福田道宏(単独) 第67回美術史学会全国大会、2014年5月16日、早稲田大学(東京都新宿区)

〔図書〕(計 1 件)

1. 「加藤信清と相国寺、大典晩年の見果てぬ夢 円通閣再建・観音懺法・清国名刹への仏典寄贈」福田道宏、『仏教美術論集』7 卷(共著) 172～194 頁、竹林舎、2014 年

6 . 研究組織

(1)研究代表者

福田道宏 (FUKUDA, Michihiro)

広島女学院大学 国際教養学部 准教授

研究者番号：10469207